
星の光は何を照らす？

春風菘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の光は何を照らす？

【Nコード】

N0522X

【作者名】

春風菘

【あらすじ】

社会人となつてから初めての帰省。
学生時代の思い出が胸を刺す。

『星の光は何を照らす?』

電車に揺られること三時間と十分。自宅のある都会郊外とは違う色の世界に迷い込んだような錯覚。温度も違えば、湿度だってもちろん違うだろう。しかし、その”違い”とは、また違う。そんな数値的なものでは説明できない、ただの主観的な感覚がざわついた。

わざわざ有給を取ってまで作った二週間だけの夏休みだ。大学を出てから三年目、会社勤めし始めてからも三年目になって、ようやく身の回りは落ち着いていた。だから、こうして里帰りも出来る。俺は今日、三年ぶりに親父と母さん、そして妹に顔を見せる。

俺が入社して半年後の十月、大手と契約が決まり、社内は慌しくなった。滅多にない、会社全体の好機に、社長から平社員まで、全員が全員働き詰め、その年の正月休みはそれこそ三日のみだった。それでも、誰も文句なんて言わず、むしろ喜んでいて。笑っていた。忙しいことが嬉しい、と思っていた。自分の会社といえど、所詮中小企業なのだ。そんなチャンスがやってきて、嬉しくないはずがなかった。一端の製造会社は、活気に満ちた。

俺は、特に働いた。他の同期の二倍も、三倍も働いたんじゃないか、と自負できるほどだ。それでも、身体を壊すこともなく二年目は皆勤。契約の締結数はよく飲みに行く相川の二倍だった。そんなこともあってか、俺は今年の春に昇進した。係長を飛ばしての、異例となる課長就任。二十五で、といえばスピード出世になるのだろうか。企画部での発言権は増えたが、その分忙しさはいつまでたってもなくならなかった。だから、今回の帰省は、俺にとっては不本

意だ。部長と専務に呼び出されて、「一度のんびりしてみたらどうか」と言われなかったら、考えもしなかったろう。しかしまあ、俺があまりに働きすぎた所為で、身体を心配してくれているのは分かった。だから、今回の帰省を決意し、有給を使った。有給を使うのは初めてだったりする。

電車を降りてからというもの、辺りにはビルもなければ、家もない。あるのは、一本道と田んぼであって、蛙はまるで雨を求めるかのように濁った声を上げる。おぼろ雲は、より一層、田舎っぽさを表している。線路を遠ざかる白い機体だけが、俺の見慣れた世界に溢れる人工物だった。

携帯電話を取り出し、一番右上のボタンを押す。アドレス帳のグループにある、妹の名前に電話を掛けると、ツーコールで声が聞こえた。

『もしもし』

「俺だ。今駅なんだけど、迎え、お願いできるか？ こっちの家の場所覚えてなくてさ」

実家の場所を忘れるとは、俺はどうかしているのか、まったくいや、それだけ都会の暮らしが大変だった、ということだろうか。

『うん。分かった。じゃあ、今から行くねっ』

心なしか大人びた雰囲気の漂う声で、思い出す。よく考えれば、妹ももう高校生になったのだ。今年で十六だもんな。東京の女子高生はひどいものだ。肌の露出が多いは、髪は染める、香水臭い。そんな子を良く見かける。それに比べて、俺の通っていたこの高校なんてのは、ほんとに不良というのが居ないほどだ。だから、電話の後十五分で、自転車に乗ってやってきた妹を見て、少し嬉しかった。兄としては、ああはなってほしくなかったから。

「お兄ちゃん！ ひっさしっぶりー！」

まだ二百メートルぐらいあるくせに、あいつは大声で俺を呼んだ。流石に、他に音のないここでは、よく聞こえた。俺はというと、大

声出すのが嫌で、近くに来てからようやく声を掛ける。

「おう、久しぶり。なんていうか、背伸びたか？」

まるで見知らぬ人のような見た目だ。そりゃあ、三年もあれば、中学生は高校生になってきているのだから、これくらい成長してないと流石に第二次性徴を疑う。俺の胸辺りだった天辺は、鼻の辺りまで届いていたし、髪も伸びたかな。ショートヘアで活発だった少女は、セミロングで淑やかになっている。それくらい、三年と言うのは大きいのだろうか。

「お兄ちゃんは今流石にもう変わらないけどね。……でも、ちょっと痩せた？」

「よく分かるな。最近仕事詰めでな、大学時代みたいに部活やらサークルなんかもない分、運動してないんだよ」

「体に悪いよ。たまにはジョギングとかでもしなきゃだめだよ」

それくらい分かっているさ。だけど、時間がそれを許してくれないのだ。昇進して、ますます大変になった。平社員時代は、課長とか、部長とか、暇そうに見えたのに、現実ではなかったみたいだ。

「さ、お母さんも待ってるし、早く行こっ！」

そういつて腕を組む妹は、中身は何も変わってなかったみたいだ。肌から伝わる体温は、変わってない。変わったのなんて、せいぜい髪から香るシャンプーの香りくらいだろうか。

その後着いた玄関に居た母親は、ほとんど変わってなかった。こちらは外見も中身も。成長はさすがにもうしないだろうし、当然か。

「母さん、俺の部屋ってまだそのまま？」

「ええ。たまに掃除はしたけど、そのままよ」

何もない部屋だけど、俺の親はそんな部屋すら元のまま残しているあたり、律儀なのか、単に無関心なのか。別に物置に使ってくれても構わないというのに、なんとなく嬉しかった。三週間なんてあつという間に過ぎるけど、その後もまた、この部屋はこのままなのか、と思うと、余計嬉しかった。

ひとまず、荷物を出す。……といつても着替えと洗面用具。それぐらいのもんだ。実家なのだから、大体のものならここにあるのだ。それだけの荷物だから、すぐに出し終わってしまい、俺には一気に暇が押し寄せる。普段の生活ではありえないことだ。午後三時。まだまだ忙しい時間帯だ。

とはいえ、一息ついた俺は、散歩を試みる。はき慣れたスニーカーはかかどが磨り減り先が汚れていて、紐先は広がっている。そいつと一緒に、懐かしい道や景色を歩く。

始めに目指したのは母校。歩いて十五分ほどにある懐かしいそれから、野球部の金属音がまだ高校が見えないあたりからでも耳まで届く。それぐらいのどかで静かなんだなあ、と改めて実感する瞬間もあった。フェンス越しに見るグラウンドは、俺がお世話になった野球部顧問の中岸先生が、相変わらず大きな声で叫びながらノックをしている最中だった。声をかけようか、かけまいか、と悩んだ挙句、気がついたら話しかけられた。

「仲田……か？」

これまた相変わらず、おっさん臭い低めの声で名前を呼ばれて、昔の癖か気をつけをしていた。

「中岸先生、お久しぶりです」

「おお。久しぶりだなあ。確か……二十五ぐらいか？」

「はい、今年で二十五になります。だから、もう七年ぶりになりますね」

「どうだ、社会は。大変だろう？」

「はい。忙しくて帰省も今まで出来ませんでしたから。……そういえば、最近の野球部はどうですか？」

顧問が横に抜けても練習を続ける見た限り九人の部員たちは、これすらも相変わらず丸坊主だ。俺たちの代は、一度甲子園まで行ったのが高校時代の自慢の一つだが。

「落ちてきてるな、正直。最近は県大会止まりだよ」

「大変ですね……」

眺める限り、ただのノックなのに、ミスが目立つ。見た感じ、一年生ではない。ということとは、ダメダメだ。これは県大会止まり、と言われて納得できる出来だ。

「部員も、もう限界だからなあ。この辺りも過疎が進んでるし、十年もしたら廃校、なんて意見も出てるしな」

田舎の現実……か。俺たちの頃は活気で溢れていたのにな。思い出される母校は、後十年の命なのか。そう言われて浮かぶ数々の光景が、気がついたら俺を墮とした。

八年前。高校二年生になり、下級生もできたことで余裕が出始めた頃か。それは七月であり、夏であった。部活ではいい成績を残しており、とはいつて勉強も同じように出来るわけではなく。学業の難に頭を抱えている俺は、テスト直前、まさに勉強するには打ってつけたった図書室に顔を出すことにした。野球部の坊主頭は、本に囲まれると滑稽でしかなくて、内心恥ずかしかつたのだが。だから「野球部の方ですよ。本をお探ですか？」

と肩を叩かれたときは、大袈裟に驚いたものだ。

「い……いや、ただ勉強しようと思って……。えーと、」
「野中瑞希です。図書委員です。どうぞよろしく」

少し頭を右に振って微笑む彼女に、俺は惹かれてしまっていた。こんなこと言うもんじゃないが、別にその子が格別可愛い学年のマドンナであったわけではなく、俺は今でも何故その瞬間に惚れてしまったのか分からなかったりする。

そのくせ、野球部は甲子園に出場し、三回戦まで進むほどになったのは部活が死ぬほど忙しくなったからだ。結局、その夏に図書室に行ったのははじめの一回だけで、瑞希の顔を見たのも一度きりだった。

だから、だからこそ、九月の定期考査の一週間前になり、部活が

無い状態になった俺は、勉強のために図書館に行くのが嫌だった。

もし、俺のことを覚えてくれていなかったら、もう話せないよな……、とか。いや、覚えてるわけないよな……、とか。ネガティブな思考は抜けきらない。折角扉に手を掛けても、引けないでいた。

「仲田君？ どうしたの？」

と、また肩を叩かれた瞬間、俺は同じ反応をした。果たして、それが面白かったのか、野中さんはまた微笑をくれた。

七年前。三年生、つまり受験生としての自覚を今更持ち始めた頃か。県大会の決勝で負け、二度目の甲子園にはいけないまま俺の部活動は終わり、学校内は学校祭のムードに染まる秋。昨年知り合った瑞希との交際も順調で、俺にはやはり勉強以外の不安は無かった。毎日放課後に図書室に顔を出し、瑞希と一緒に勉強する。成績のいい、頭のいい瑞希にいつも教えてもらい、確かに去年から比べると順位は五十番上がったし、平均点も十点上がった。

担任も親も、嬉しそうにしていたけど、俺は喜べなかった。なぜなら、この点では瑞希と同じ大学は少しきついからだ。瑞希に俺の行く大学についてきてもらう、なんてことは何があっても嫌だった。でも、同じ大学に行つて、一緒に過ごしたい。つまり、俺が瑞希のレベルに合わせるしかなかった。

そりゃあもう必死に勉強した。たまに、瑞希に心配されたけど、朝早く起きては単語を覚え、夜遅くまで起きては問題集を解いた。それは何とか実り、センター直前のテストの点はこれまでとは別人のように良い点を取った。全体平均で七割強。レベルで言えば、瑞希に並べたほどで、ようやく志望校の合格率でいい評価をもらえた。「すごいじゃん！ この調子で行けば一緒に大学行けるね！」

「ああ、ほんとだよ。つつても、瑞希のおかげだけだな。勉強教えてもらいまくつたし、ほんと迷惑かけてごめん」

「迷惑だなんて、そんなこと無いよ。私だって、一緒に大学に行きたいもん」

無邪気な笑顔が、今の俺にはひどく懐かしい。大学入試で、俺は見事合格した。が、運命は俺に皮肉だったのだ。瑞希だけが、不合格。俺にとっては、最悪の結末となってしまった。

それから瑞希とはなんとなく話しづらくなってしまい、外でも中でも遠く壁の向こうに行ってしまい、つまり、世間的に言う自然消滅を果たしてしまったのも、もう七年前なのだ。こうして思い出すことは、なぜか瑞希の顔ばかりで、瑞希の言葉ばかりだった。まったく、俺の高校生活は瑞希との時間だったようで、甲子園に行ったときの感動なんてものは欠片も無いのだから、中岸先生には申し訳なく思う。

「どうだ？ 今度酒でも飲み。お前ももう社会人だからな、酒も飲めるだろ」

現実に引き戻った俺は、そんな先生の誘いを受ける余裕をなくした。まったく、嫌なことを思い出してしまったものだ。

「いえ、遠慮します……。先生もお忙しいです。では、そろそろ行かないといけませんので。失礼します」

「そうか？ またいつでも帰ってこいな。都合のいいときにでも飲みに連れてってやるから」

本当は俺は酒が飲めないのだが、それ以上に、思い出が楽しい時間妨害する。

瑞希は、今頃何をしているのだろうか？

あれから、結局瑞希とは連絡を取っていない。可愛らしい子だから、今頃は俺なんかよりよっぽどいい男見つけて結婚でもしてるだろうか。それとも、俺と同じように、職場で汗水流しているのか。どちらにせよ、今の俺にはもう関係の無い話なのだろう。本音を言えば、瑞希とまた一緒に過ごしたいのだ。しかし、それは永遠に叶わない。俺は瑞希を目指して、超えてしまった。瑞希は、俺に追いつけられて、置いていかれた。それは決定的な亀裂を表してしまっ

たから。

そんなブルーな気持ちを引きずったまま散歩なんて出来るはずも無く、はじめたばかりの散歩は終わりを告げた。実家に戻り、部屋で寝転んだ。この部屋で、確か俺は始めて瑞希、と名前で呼んだ。この部屋で、初めて瑞希からキスをされた。この部屋で、瑞希と勉強をした。この部屋で、瑞希と過ごした。この部屋で、

嫌悪は加速するだけ加速する。それは終わることなく、ただただ勢いを増して激しくなるだけ。

折角のんびりしていた午後のひと時は、そんな回想で碎け散って、蒸発した。

つらい、すっぱい、切ない、鋭い、痛い、悲しい、苦しい、とげとげしい、いたたまれない、やりきれない。

瑞希の微笑みの記憶は、俺の心を、五時になってもまだまだ高い太陽とは正反対に、真っ暗闇に染めていった。

昨晚、あれほど嫌なことがあったばかりの癖に、俺は悠然と朝を寝過ごす。携帯の目覚ましは見事に空振り、今日は朝からまた散歩の続きをしよう、と決めていたのだが、さすがに寝起き正午から散歩する奴ではないので、朝食兼用の昼食を腹に収めた。

相変わらず部屋でだらだらしていた俺は、リビングから「おやつよー」と声がかかるのが信じられなくて、大袈裟に飛び跳ねたぐら이다。なんでも、折角帰ってきたからケーキを作ったんだそうだ。どうにも、まだこっちの生活に慣れられない。

「大袈裟だよ、母さん。ただの帰省なんだからさあ」

「そりゃあ大袈裟にもなるわよ。三年ぶりよ？ もう、母さん、嬉しくて嬉しくて」

「息子として嬉しいよ。その……なんていうか、ありがとう」
とばかり言っつて、人差し指で頬をかく。こんなこと、学生の頃は恥ずかしくて言えなかった。社会に出て、初めて親の大きさを知ってから、いつか言わなきゃな、とは思っていたけど。今日、やっと言えてよかった。感謝の気持ちとは、伝えなければ意味は無いのだ。いつ死ぬかも分からない世の中で、何もいえないまま会えなくなるくらいなら、いつそ恥ずかしい思いをしたほうがマシだ。

甘めの生クリームが口の中をとろける頃、母さんは頬を一筋濡らしていた。

余ったクリームを乗せたコーヒを飲み終える頃もまだ、日は燦々としている。ここところ、夜は短くなっていて、六時を過ぎてもまだまだ明るいほどなのだから、時計が四時半を指す今、明るいのは当然だろう。昨日とは打って変わって、明るさはすなりと入ってくる。まったく、皮肉なものだ。ぼーっとしているだけでも瑞希が顔を出すというのに、それすら先ほどの甘さが溶かしていることに、俺は気づくはずが無い。

それでも、俺はここでの滞在を短くすることを決めていた。二週間の予定を、三日まで縮めることにしたことを母さんに言わなければならぬ。

「なあ、母さん。俺、ちょっと用事が出来ちゃってさ。明日帰る事になったんだ」

あくまで、内は明かせない。いらぬ心配をさせたくない、というのもあったが、本心ではない。隠した気持ちは、つまり負の全てでしかなかった。

「あら、そうなの？ 折角帰ってきたのにねえ……。残念だわ」

「来年も帰ってくるよ。どうせ上司にまた言われるだろうしさ」

嘘笑いを作る。頬を少し上げて、目を細めて。一会社員として、

一年目に学んだそれは、自分でもうまくいったと思えた。思えたのに。

「……あんだ、嫌なことでもあったかい？」

愚問だろうか。それはくだらない質問だろうか。もしくは、とても大切で、避けては通れない疑問だろうか。

気が付いたら、俺は家を飛び出していた。衝動に駆られた、というよりはただ逃げたかっただけかもしれない。

母さんは俺の全てを見透かしたように、悲しげな目で呟いたのだ。俺は内心、かつ、ときた。イラッ、ときた。実の母に、一瞬の憎しみを覚えてしまったことが、また自己嫌悪に繋がる。それすらも、また瑞希との思い出をこじ開けた。

「瑞希！ やった！ 俺、受かったよ！」

大学の合格発表。張り出された無数の数字の羅列から、自分の持つ紙に印字されたものと同じ順列を、俺は目に見た。それはつまり、俺の合格を証明したものであり、瑞希と勉強してきた甲斐であった。だからこそ、真っ先に瑞希に隣で物憂げな俯きをしていたことにも気づかずに、これ以上無いというほどの笑顔で言ってしまったのだ。人生で最大の過失だった、と今でもはつきり断言できる。自分のことしか考えていなかった、と断言できる。

「……よかったね……………」

瑞希の、その涙を堪えて搾り出した言葉に、瑞希の本心に、俺は怒鳴ってしまったのだ。

「なんでそんなに嫌そうにいうんだよ！ 俺が受かったのを嬉しく思ってくれないのかよ？」

俺の耳に届いた瑞希の言葉は「辛そう」というよりは「嫌そう」だった。詰まらなさそうに、気だるそうに言った、と勝手に感じ取った。だから声を荒げた。あんだだけ一緒に勉強して、あれほど一緒に過ごして、あんなにもここを一緒に目指していたのに、瑞希が嫌

そつに見えたから。ほんとに、自分勝手だよ。

瑞希は、そんな俺に、今度は泣きながら、しかしはっきりと一言だけ言い放った。

「……ごめんね」

そして、それが、俺が聞いた瑞希の最後の音だった。

彼女は走り出してしまった。俺に背を向けて、遠く、遠くに。追うことも出来なかったのは人ごみの所為か、俺が勝手にイライラしていたからか。こんな問いは必要性はない。答えは確実に後者だから。

それにしても、嫌なことばかり思い出すのは何故だろうか。そんなにここには、この田舎町には嫌な思い出しかないのだろうか。

コンビニが一つしかなくても、高校が一つしかなくても、遊園地なんてなくても、高層ビルなんかなくても、高速道路なんかなくても。俺はこの町が好きだったはずなのに。なのにどうして……。自己嫌悪の矛先は、いよいよこの土地全てに対してまで膨れ上がる。コンビニが一つなのがいけないんだ。高校が一つしかないからいけないんだ。遊園地が無いからいけないんだ。高層ビルが無いからいけないんだ。高速道路が無いからいけないんだ。何も無いからいけないんだ。

四時半のコーヒープレイクから一転、五時の涙は、それこそコーヒークップ一つ分ぐらい簡単に溢れさせれるほど雫を落とした。逃げて、走って、もがいて、たどり着いた公園のベンチの足元には点々と濃い茶色の砂の塊があった。俺は、涙が枯れる、ということは今更ながら体感した。

家に帰ろうにも帰れず。俺は泣き疲れてか、知らないうちにベンチの上で眠っていたようで、肌寒さが多少襲ったところで目を覚ます。五時にはまだ明るかった世界は、もう暗かった。田舎の夜は本当に真つ暗で、ビル街もないし、住宅街もない。窓からもれる電灯や、車のライト、人の喋る声。都会とは、本当に打って変わって何も無かった。

「んっ……」

一度、身体を起こして背骨を伸ばすと、骨のなる音が夜空に消えていく。なんともいえない喪失感、夜になってさらに加速を始める。それは、一気に暗くなる最近の夕方のように、日が沈めば月のぼっていく。俺の中に、希望は沈み、ひしひしとした絶望と虚無がこみ上げる。

どうして、こうなのか。何故、俺は悲しむのか。理由は、何なのか。

もちろん、分かっている。俺が弱いだけだろう。俺が弱いから瑞希を笑顔にすることも出来ないし、俺が弱いからこそして逃げてきた。俺が弱いから、負けたくないとしたただ働き、俺が弱いから、後ろめたく考えているだけだ、と。

もし、俺が強ければ、今頃隣に瑞希が居て、一緒に笑いながら食事でもしてるだろう。もし、俺が強ければ、今頃仕事でも余裕を見せながら、適度な仕事を適度な立場でしているだろう。

「くそ……くそっ……」

俺の嗚咽は虚しく真つ暗な中に消える。飲み込まれるように、一瞬でなくなってしまう。それが、また余計辛かった。誰の返事も無い、誰の声も聞こえない。このまま、あの声と同じように消えれたら、どれだけ楽だろうか。そんなことまで考え始めてしまう当たり、暗闇とはまさに人の心の悪い部分を勢いづけるものなのかもしれない。

い。

「……………」

風に揺れてブランコが軋む。しかし、それもすぐに立ち消え、また無音は訪れる。悲しくも、現実であり。苦しくも、現実なのだ。

ふと見上げた空には、文字通りの満天の星空が広がる。小学五年生頃か、星の観察を自由研究でやった覚えがあり、その影響か、少しばかりは星には理解があるため、星空に対してすら嫌悪を抱く結果となる。

瑞希と一緒に見たことのあるその星空は、所詮仮初なのだ。

星は、実際は何千万、何億光年も遠く離れたところにある。つまり、今地表から見える輝きは、何千万、何億年も前のものであり、現在のものではない。過去の輝き、明るさなのだ。もはや声を出す元気すらないほど、俺の心は荒んでいる。世間一般からすれば美しいであろう星の瞬きすらも、今の俺の目には希望の欠片も無く、それはただの粒でしかない。

たとえ、今の俺がこの星空を美しい、と形容できたとして、その結果はどの道絶望なのだが。こんな美しい星空を前にして、俺は明日都会へ帰る。それがどれだけ辛いことか、俺には想像できる。どうせ、もうすぐいつもの日常に戻る。ここで楽しむことも、癒しを求めることも許されない。なぜか。それは、また求めてしまうからだ。酒やタバコ、薬物なんかと同じ、依存。

つまり、ここは俺にとって苦痛でしかないのだ。星空で少しばかり照らされたこの町全てが、傷みとなっているのだ。

じゃあ、どうすればいいんだろうか？

残念なことに、俺のその問いに答えをくれる『誰か』は存在しない。昔居たその一人すら、今はもう見えはしない。いや、その人で

すら、俺を苦しめるのだから、俺には救いはどこにもないのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0522x/>

星の光は何を照らす？

2011年9月25日21時03分発行